

ヘーゲルの刑法上の行為論

椿 幸 雄

- 一 はしがき
- 二 序 章
- 三 ヘーゲル「法の哲学」における行為論の象面
- 四 ヘーゲル「法の哲学」と刑法上の行為論との連関
 - (一) ヘーゲルの行為論
 - (二) 行為と目的および「故意」との関連
- 五 結 語

一 はしがき

19世紀ドイツ刑法学の第二期は、ヘーゲル哲学によって、その基礎的萌芽を与えられた。また、刑法学上の行為概念の歴史においても、ヘーゲルは、大なる転回点をもたらしたのである。とくに、刑法上の行為概念は、ヘーゲルとその刑法学派によって、刑法体系の中心問題たらしめられたといつてよい。ヘーゲル刑法学派の行為概念は、19世紀の80年代にいたるまで、ゆるぐことなき地歩を築いていたのであった。そうして、刑法学説史的には、ヘーゲルとその刑法学派によって、行為と不法とが相互に密接に結びつけられたのである。ラートブルッフが、いみじくも指摘するように、まさに、ヘーゲルは「刑法上の行為概念の父」であった。⁽¹⁾

本稿は、かような状況をふまえて、ヘーゲルの刑法上の行為論に基礎的な考察を加えることを意図したものである。もっとも、ヘーゲルが、この問題を真正面からとり上げて精細な理論を展開しているわけではないのである。

小稿で論ずるところは、ヘーゲル「法の哲学」⁽²⁾の中にあらわれる刑法理論（犯罪と刑罰との理説）とそこで若干触れられているその行為論を思索の出発点として、彼の他の著作とりわけ、いわゆる「エンチクロペディー」⁽³⁾、「歴史哲学」⁽⁴⁾、「哲学史講義」⁽⁵⁾および「哲学入門」⁽⁶⁾をも、必要な範囲で参看しつつ、私なりに総合的に判断をして、それらを融合せしめるという作業を進めながら検討を加えたものである。したがって、行為論の構造、いわゆる「故意」概念についても、刑法学上のそれと必ずしも等置されない側面もあることは認めねばならない。ただ、刑法学説史上のヘーゲル行為論の占める位置を明らかにかならしめて、現代刑法学における行為論への「架橋」の基礎をたずねる足掛りをえようとしたのである。そのためのいわゆるヘーゲル刑法学派に属する刑法学者による刑法上の行為論の考察は、紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。続稿で扱うことにする。

- (1) Radbruch, Der Handlungsbegriff in seiner Bedeutung für das Strafrechtssystem, 1903. S. 101.
- (2) Hegel, G. W. F., Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grandrisse (Herausg. v. Lasson, 1921) をいう。以下では、Rph. として引用する。
- (3) Hegel, Encyclopädie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (Herausg. v. Lasson, 1920) をいう。以上では、Ency. で引用する。
- (4) Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte(1920).
- (5) Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie(1921).
- (6) Hegel, Philosophische Propädeutik(1840).

二 序 章

(→ カントから、フィヒテ、シェリングを経てヘーゲルにいたるドイツ哲学の展開は、ドイツ理想主義として特徴づけられている。しかも、思弁の始源を決定的ならしめたのは、1794年フィヒテ「全知識学の基礎」⁽¹⁾の出版された年であり、他方、哲学的思弁の盛時を画するものは、ヘーゲルの死（1831年）であったといえよう。とくに、ヘーゲルは、ドイツ理想主義のもたらし

た観念論中、その意義重くかつその影響の大なること最たる人であったのである。それは、豊富な内的価値生活と抽象的な思弁に対する純粹に知的な素質の二つの能力の非凡なことによるのであろう。

カントの批判主義哲学においては、自然と自由との間、人間の感性的本質と英知的本質との間、自然法則に対する従属と道徳則の下における自由との間には、二元論（Dualismus）が存在した。けれども、ヘーゲルは異なった。ヘーゲルにとっては、英知の世界と対象に属する世界は同一である。学問的な補助概念に関するこの同一性は、数学的な一致を意味するものではなくして、自意識（Selbstbewußtsein）の中に止揚された差異（Unterschiede）の統一体（Einheit）として思弁的に理解されるべきものである。⁽²⁾ここで、思弁的というのは、所与の事実は、形而上学により引出され、経験は、理念（Idee）から、創造的・構造的に把握されることを意味するのである。

（二）ここで、ヘーゲルの行為論を理解するに、必要な限度で彼独自の弁証法について、略述する必要がある。

弁証法は、正、反、合の定立により明らかになる。この場合、正（定立）、反（反定立）は、密接に対立する二つの程度ではない。精神の運動において、相互に対立する契機であって、この精神は、合（綜合）において統一体として止揚される。分析的に見出された矛盾（定立と反定立）を上位のある定立の中へ止揚することが弁証法の目標である。これは「矛盾の統一であるから、物の変化又は運動とは弁証的に矛盾が統一されることに外ならない。実在はすべて矛盾を含み、而も其の矛盾は必然的に統一されるから、必ずそこに運動と変化とが起ってくる。運動は事物の必然的又論理的特徴である」⁽³⁾。

弁証法は、「われわれがものを考察する場合に必ず用いるところの質と量、原因と結果といったもっとも一般的な概念と、判断、推理という思惟形式、研究方法をとりあつたものである」⁽⁴⁾。ヘーゲルは、一貫して、これらの概念、思惟形式は、対立物ではなく、また、各別に孤立するものではないとして、両者が相関的に用いられてはじめて有用であると主張する。すなわち、「考察される思惟対象が、まずはじめに、その最も直接的な相のもとに

考察され、ついで突然の顛倒によって最初の相と矛盾する別の相のもとに現われる。最後にその思惟対象は、これら二つの対立する相の具体的同一性であるものとして把握される⁽⁵⁾」のである。したがって、「弁証法は、外部から、事物を取り出す構想ではなくして、事物自体に横たわる緊張 (Spannung) と運動の現出 (Sichtbarwerden)、すなわち概念の内在的自己運動である⁽⁶⁾」ことになる。

クローネルは次のようにいう。いわく「自我は、自らを定立し、また、それは非自我 (Nicht-Ich) をも定立する。しかし、その衝突 (Zusammenprall) から結果する両者の合一が、第三の命題として理解されるのは、ただ、同時にあらゆる三命題の運動 (Bewegung)、それらの体系 (System) が、そのうちで思考される場合である。けだし、第三命題は、第一命題としてのそのもの自体と第二命題としての反対命題との全体であるが、しかも、それがかような全体であるのは、第一命題の定立、第二命題の反定立、第三命題のうちへの二者の総合定立を通じて完成せられるところの運動としてあるから⁽⁷⁾」である。

「存在 (Sein) は、自己が自己自身を定立し、自己を自己自身に対して定立し、また、自己を自己と総合定立するところにおいてのみ、それ自体 (es selbst)」である。ヘーゲルは、この運動をば、それ自身のうちへの反省と命名している。存在がそれ自身のうちに反省するとき、自己は存在として——自己定立的なるものに対立して定立されるものとして——自己のうちにおいて、それ自身のうちに反省する⁽⁸⁾」と。

またいう。「定立するものに対する対立において、自己は、非自己定立的なるもの (Nicht-Sichsetzende)、すなわち存在 (Sein) である。しかし、非自己定立的なるものまたは定立されたるものは、同時にそれ自身定立するもの、すなわち自己 (Selbst) である⁽⁹⁾」。存在が、それ自身に対立するのは、それが自己に対立するからであり、「自己が定立されたものとして自己定立的なるものに対立するからである。存在は存在であるという命題の真なる (思弁的な) 意味は、存在は自己であるという命題である」にほかならない⁽¹⁰⁾。

この命題は、ヘーゲルにおいては、全体者——自らと同一的であるところ

のすべてのもの——にも妥当すると、クローネルは、さらに説いているのである。

いわく、「全体者（Alles）が、そのものであるのは、ただ、それが自らのうちに反省する限りにおいてのみである。そして、全体者が自らのうちに反省するのは、ただ、それが自らのうちへ還帰する限りにおいてのみである。しかも、自らのうちに還帰しうるのは、自我（Ich）のみである。故に、自我＝全体者（Ich＝Alles）であるから、全体者＝自我（Alles＝Ich）ということになる。自我はただ全体者であるが故においてのみそれ自身である」¹¹⁾と。

かくして、ヘーゲルによると、全体者のうちに自らを再発見することが哲学の課題をなし、そして、哲学は、全体者の自己認識であるということになる。¹²⁾

- (1) Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre.
- (2) Vgl. Bockelmann, Hegels Notstandslehre, 1935—in v. Liszts Abhandlungen des Krim. Seminar. Band III, Heft 4, S. 26.
- (3) 金子馬治「ヘーゲル哲学序説」, 早稲田大学 文学部 哲学科編, ヘーゲル哲学所収, 31頁。
- (4) 松村・甘粕「ヘーゲル」14頁。
- (5) René Serreau, Hegel et L'Hégélianisme, p.19.
- (6) Eckhart von Bubnoff, Die Entwicklung des strafrechtlichen Handlungsbegriffes von Feuerbach bis Liszt unter besonderer Berücksichtigung der Hegelschule, 1966. S. 38.
- (7) Kroner, Richard, Von Kant bis Hegel. 2 Bd.—Von der Naturphilosophie zur Philosophie des Geistes—, 1924, S. 284.
- (8) Kroner, a. a. O., S. 318.
- (9) Kroner, ebenda.
- (10) Kroner, ebenda.
- (11) Kroner, ebenda.
- (12) Kroner, a. a. O., S. 319.

三 ヘーゲル「法の哲学」における行為論の 象面

まず、第一に、自由概念による行為問題にいたる接近を試みなければならない。

ヘーゲルの自由の「理性概念」(Vernunftbegriff)においては、カントの「悟性の自由」(Verstandesfreiheit)は、背景にしりぞけられている。

カントは、先験的自我(Transzendentalen Ich)の否定的性格を発見し、意志の自己規定の法則を形成したのではあるが、その際、活動する意志の、その内容の自己規定が、外部から把握されるのではなくして、同時に、自我の概念の中にふくまれている第二の否定によって、第一のものの止揚が結果するということを看過した、と、ヘーゲルは指摘する。

そこで、ヘーゲルは、「規定という第二の契機は、第一の契機と同じく、否定性(Negativität)であり、止揚である」。すなわち、それは、純粋な先験的自我意識の第一の抽象的否定性であるとし、「一般に、普遍性(Allgemeine)の中に、特殊性(Besondere)がふくまれていると同じように、この第二の契機は、第一の契機の中にふくまれているのであって、ただ、第一の契機が存在するところの定立(Setzen)にすぎない」と説き、さらに、「自我におけると同様に、普遍性のまたは同一者の中で、内在する否定性を把握する」こととしたのである。ヘーゲルは、そこでいう。「自己自身を一個の規定されたものとして、定立することによって自我は定在一般となってあらわれる。——これが自我の有限性もしくは特殊性という絶対的契機である」と。

ここに、ヘーゲルのカントを超えての、さらなる哲学の思弁的な固有の歩みがあったとみることができるのである。

かように、ヘーゲルは、二つの契機すなわち普遍性と特殊性との区別、さらには、それらに上位する統一体を追考し、それらを同時に、概念の弁証法的運動で統合した。換言するならば、「活動する(tätig)普遍性」としての意志は、それを規定し、制限する特殊性を、終局的には、自己自身定立するの

であるから、意志は、また、再び、止揚される。したがって、この運動は、意志の普遍性を結果する。すなわち、動機として規定された内容を作り出し、この内容の行なう現実性（Verwirklichung）の中で、再び、普遍性へと還帰するのである。

意志は、故に、「自己内（in sich）反省をなし、それによって普遍性へと再び導かれた特殊性——すなわち個別性⁽²⁾」であることになる。また、これは、ヘーゲルによるならば、「自己の対象を越えて広がり、その自己規定によって貫ねかれた規定の中で、同一的な普遍性⁽³⁾として、自由なる意志の概念⁽⁴⁾」、すなわち「自己自身を規定する普遍性⁽⁴⁾」なのである。また、ヘーゲルは、精神の本質は、形式的には、自由すなわち自己同一性としての概念の絶対的否定性⁽⁵⁾であるから、自由は、精神の実体であり、それは、他者に対する非依存性、自己を自己自身に関係させることである⁽⁶⁾、ともいう。

かような活動する普遍性としての意志の弁証法的構造は、有限の意志が、行為（Handlung）の中で完成する規定、また、無限の意志あるいは理念（Idee）の自己運動の中でも現実化する。

（一）有限の意志または恣意（Willkürwill）は、悟性的反省が、それに示された意志である。その意志には、定在した現実在が、それに対してみられ、その中で、動機（Motiv）が、目的（Zweck）として、現実化されねばならないのである。理性の観点からみるならば、意志は、「私は選択することができるから、私は恣意を有するのであるが、これを、人は通常自由という」。しかし、「選択は自我の無規定性と内容の規定性とのうちに存する。したがって、意志は無限性の面を形式的に、帶有してはいるが、その内容の故に自由ではない⁽⁷⁾」。故に、その形態が、なお、内容から分離されている限度で、自由の知であることになる。意志は、他のもの、意志にとっては、なお、外的なものを意欲しているのではなく、それ自体、対象を獲得したときに、真実態（Wahrheit）に高められることになる。

（二）無限の意志すなわち向目的（an und für sich）に存在する意志が問題になる。ヘーゲルは「絶対的に存在する意志は、真に無限である。けだし、

その対象が自己自身であり、したがって、自己の対象が自己にとって、他者でもなく、制限でもなく、かえって、かかる意志は、対象において、むしろ自己還帰しているにほかならないから⁽⁸⁾という。いわば活動する無限 *infinitem actu* であるにほかならないのである。この無限の意志は、法のうちに直接的・抽象的定在を、また、われわれの考察にとって、決定的な意味をもっているところの領域すなわち道徳性 (*Moralität*) のうちでは、媒介された定在をもっている。というのは、道徳性の立場は、意志が、単に、即目的 (*an sich*) に無限であるのではなく、対目的 (*für sich*) に無限である場合の意志の立場であるからである⁽⁹⁾。

法において、人間は、ただ形式的に自由な人 (*Person*) として認識されるのであるが、道徳性においては、主体 (*Subjekt*) すなわち個人的・意欲的・行動的人間として認められる⁽¹⁰⁾。この点に関して、ヘーゲルは、次のようにいう。意志の「自己内反省、および即自的存在、ならびに直接性に対する意志の対自的に存在する同一性、この同一性のうちに展開される規定性が、人 (*Person*) を主体 (*Subjekt*) たらしめる⁽¹¹⁾」と。「私の意志が、所有において、外的な事物のうちにおかれる⁽¹²⁾」のに対して、意志は、直接的な意志に具体化される。また、外的な事物に具体化された意志は、相互に衝突をするが、意志としての定在には、かようなことはない。「一切の外部からの強制を超越している」のである⁽¹³⁾。

人 (*Person*) は、ある他のものを通してのみ、それ自体に直接的定在を与えるのであるが、主体 (*Subjekt*) は、異なる。これは、それ自体への関係において、自己同一的定在を有するが故に、意志は、ここにその定在的側面をもつにいたることになる。

そうして、「意志のこの主体性は甚だ重要な概念である。主体性は自由の自己規定であるから、それ自体概念の規定性をなしている。概念なるものは、かかる主体性の規定から出発しているからである。ここに於て、意志の定在は概念そのものとなり、そしてその主体性の概念の定在を作り出して来る。自由の概念とその定在との関係に於て、自由に対する一層高き地盤が規定せ

られて来る。これ道德なるものが、善といふ普遍的の理念を、まだ実現せられない形に於てではあるが、とにかく実現せねばならないものとして定立し得る所以である。」⁶⁴ このように、意志の主体性の内に、かかる理念の実在的契機が含まれているが故に、「主体的なものとしての意志の内のみ、自由もしくは即目的にある意志が現実的であり得る」⁶⁵ことになる。

しかし、意志の形式的性格は、勿論、いまだ、止揚されてはいはしない。なぜかならば、主体の意志または主体的意識は、ヘーゲルによるならば、普遍的意志と即目的に同一であるのみであって、これは、人倫の段階において、完結するものであるから、意志は、ここでは、有限の構造をもち、客観性に対立することになる。⁶⁶

かくして、われわれは、ヘーゲルの行為論を、法と人倫との間の絶対的理念の外面化の段階——すなわちヘーゲル哲学においては、かなり縮減され、断片的地位を与えられているにすぎない道德性のうち——に求めることができる。その際、ヘーゲルは、主体性 (Subjektivität) の立場に、行為論の存在を認めたことに注目せねばなるまい。ヘーゲルは、主体性の絶対的法、行為の中で目的を現実化する、決定的・個別的意志の法を強調したのであった。また、道德性においては、「無慈悲なる法のもとに於て、尚問題とされなかった私の原理、私の意向に対する反省、一般的に意志の動機に対する問が現われる」⁶⁷ことになるのである。

(1) Hegel, Rph. § 6.

(2) Rph. § 7.

(3) Vgl. Rph. § 24; cf. Reyburn, The Ethical Theory of Hegel—A Study of the Philosophy of Right—p. 163.

(4) Rph. § 21.

(5) Hegel, Ency. § 382.

(6) Ency. § 382 Zu.

(7) Rph. § 15 Zu.

(8) Rph. § 22.

(9) Vgl. Rph. § 105; § 106.

- (10) Vgl. wolff, Der Handlungsbegriff in der Lehre vom Verbrechen, 1964, S. 33.
 (11) Rph. § 105; vgl. Ency. § 503.
 (12) Rph. § 90.
 (13) 高峰一愚「法・道徳・倫理」126頁参照。
 (14) 田村実「ヘーゲルの法律哲学」189頁。
 (15) 田村・前掲書 190 頁。
 (16) Vgl. Josef Derbolov, Hegels Theorie der Handlung, S. 204.
 (17) 竹田直之「ヘーゲルの客観的精神」(ヘーゲル復興・第一冊(1931年)所収) 202頁。

ヘーゲル「法の哲学」と刑法上の行為論との 連関

(一) ヘーゲルの行為論 ヘーゲルは、行為の形式的概念を与えることを求め、これをば、主体的意志の外面化 (Äußerung) として把握したのであった。

ヘーゲルによるならば、行為は「主体的または道徳的意志の外面化」⁽¹⁾である。すなわち、行為を道徳性の発展段階における自由意志として特徴づける⁽²⁾。抽象法において、意志は、ただ、即目的に無限であるにすぎないから、意志は、いまだ自己自身を反省するには至らずして、もっぱら外に向かうから、人 (Person) は、物件への権利を有するに止った。しかし、いま、道徳性において、意志は、対自的に無限であるから、人間は、主体として、自己の行為の内容を、自己自身で規定し、自己の意志したところのものに対してのみ責任をもつという権利を有することになるのである。ここに、ヘーゲルが考えたいわゆる帰責理論の解明への伏線が巧みに敷かれていることに注目しなければならない。

行為は、ヘーゲルにとっては、主体的意志の統一体であり、これにより引き起こされた外的定在の統一体である。なぜならば、意志は、ここでは、意志に対立して存在する外的定在に向けられ、それ故に、意志は、その内容にしたがって、有限であり、また、制限を受け、そして、その形式は、有限の

意志であるからである。これは、恣意としての意志であって、意志の「差別（Differenz）・有限・現象」の立場である。⁽⁴⁾この点は、次になされる考察により、三者、それぞれが明らかならしめられることになると共に、本項において行為概念の規定が結論として示されることになるであろう。

外的定在は、意志の実現として現われねばならない。また、外的定在を導き出すものは、主体的意志の「故意」（Vorsatz）でなければならないのである。したがって、内的に故意として存立するところのものを定在と一致せしめねばならないことになる。故意概念については、次項で詳細に触れるところがある。

さて、ヘーゲルは次のように説く。いわく、「意志の自己規定は、同時に、その概念の契機であり、主体性は、意志の定在の側面であるのみならず、意志そのものの規定である」⁽⁵⁾と。すなわち、意志の概念に即していうならば、即自的に存在する普遍的意志と対自的に存在する個別的意志との対立のうちに自己を定立し、次いで、この対立の止揚、すなわち否定の否定によって意志が単に即自的に自由意志なるのみならず、自覚的（für sich selbst）にも、自由な意志であるような、定在における意志として、したがって、自己を自己に関係せしめる否定性（Negativität）として規定する、のである。⁽⁶⁾「主体的と規定せられたる対自的に自由なる意志は、まず、概念として存在するが、理念（Idee）として存在するために、定在を有つ。道德性の立場は、故に、その形態において、主体的意志の法である。この法にしたがい、意志は、あるものを、それが、自己のものであり、その内において、意志が、自ら、主体的なものとして存在している限度で、これを認め、かつ、その何ものかなのである」⁽⁷⁾。

これによって、道德性の世界は、主体的意志の法が発展してゆく過程であることがわかる。しかも、この過程は、無限なる自己規定として現われる。故に、自己規定は、道德性の世界においては、静止することのない活動であり、それが、あるところへは永久に到達し得ないものである。先に触れたように、意志は、人倫において、はじめてその概念と同一になり完全に実現せ

られるにいたるのであるが、ここでは、この両者は単なる意識せられた関係であるにすぎないのである。

意志の理念としての善が、主体的意志の内に指示されるとしても、これは、いまだ実現せられざるものであり、また、無限に実現して行かねばならぬものである。この関係を、ヘーゲルは、当為（Sollen）という。当為は、無限に追求して行かねばならぬ要求の立場であるから、道徳性の立場は、関係および当為もしくは要求の立場であるといえることができる。⁽⁸⁾したがって、道徳性の立場は、「つねにべしであって在るではない」⁽⁹⁾のである。

そこで意志と当為との関係は、普遍的意志との直接的な同一性によって、行為する意志にふさわしいものであるといえることができる。というのは、普遍的意志は、ヘーゲルにとっては、特殊の意志の規範原理（Normprinzip）であるからである。また、普遍的意志は、当為としての差別（Differenz）の見地から、これらに対立する。⁽¹⁰⁾なぜかならば、主体性が確立せられると、ここに、主観と客観との差別が生ずる。「この差別の規定は、かの意識の立場であるから、道徳的立場は、先ず、主観と客観との関係としての形式と、この関係とは無関係に措定せられるものとしての内容との、両者に分たれる」⁽¹¹⁾からである。

道徳性の世界は、このように、差別の世界である。ために、私の目的が実現せられて要求の客観性が得られた場合にも、なお、そのうちに主観性が維持せられているが故に、いつまでも、他人の意志への積極的關係を固持して行くことになる。

かくして、道徳性の世界にふくまれた本質的關係は、「常に主観と客観との差別の内にあり、而してこの両者の結合が直ちに矛盾を産みだすことになるから、この解決は」、常に相対的たりうるのである。⁽¹²⁾この限度で、主体的意志の自己規定は、それ自体、一定の範囲でなされうるから、有限であり、また、その規定は、外部的象面をもっているから、現象の世界に属することにもなる。意志の定在の現実化への発展が呈示する第二の段階は、かように、その否定、差別の側面をもち、有限な現象界における無限の自己関係であ

って、この過程を経て、具体的定在にいたるのである。

ヘーゲルによるならば、主体的意志は、とにかく客観化せられねばならなかった。かくして、本節の冒頭で述べたように主体的もしくは道徳的意志の外面化が行為であるという定義を産み出すことになるのである。

そうして、ヘーゲルの行為概念には、次に掲げる三つの絶対に通用する規定をふくむことになるのである。

すなわち、

第一、行為は、外面性 (Äußerlichkeit) において、私によって、私のものとして認識されていること。

第二、行為は、当為として、概念に本質的關係を有すること。

第三、行為は、他人の意志と関係のあること、¹³が、これである。

このように、主体的意志の法としての道徳性は、行為の象面において、三契機を有するのであるが¹⁴、これは、本稿におけるヘーゲルの刑法上の行為概念の解明にとって、重要な意味をもっている。

(1) Vgl. Hegel, Rph. § 113.

(2) Vgl. Hegel, Ency. § 503.

(3) Ency. § 503. なお、上妻・小林・高柳「ヘーゲルの法哲学」142, 143頁、高峰「法・道徳・倫理」122頁参照。

(4) Rph. § 108; vgl. § 115.

(5) Rph. § 107.

(6) Vgl. Rph. § 104.

(7) Rph. § 107.

(8) 田村実「ヘーゲルの法律哲学」190頁参照。

(9) 高峰・前掲 122頁。

(10) Vgl. Rph. § 108.

(11) 田村・前掲 191頁。

(12) 田村・前掲。

(13) Vgl. Rph. § 113. レイバアンはいう。「われわれは行為 (actions) の世界に現存する。すなわち、われわれは、死せる事物 (dead things) に関連するのではなくして、事物を内容として包含する意志と関連する」と (Reyburn, The

Ethical Theory of Hegel, p. 166)。

(14) Vgl. Rph. § 114.

(二) 行為と目的および「故意」との関連 I ヘーゲルによるならば、意志が現われる特殊の規定が、主体的目的である。そうして、目的は、「主体的なるもの」として、まず、表象である。しかし、この表象は、存在するものとして対象の表象ではなくして、主体の活動 (Tätigkeit) を通して、引き起こされるものとしての対象の表象である。目的としての対象の表象は、主体の活動を要求し、これによって、表象された対象は、現実化されることになる。したがって、ヘーゲルにしたがうと、現実化されたる対象は、実行に移された目的であることになる。かくして、目的の実現によって、意志は現実化され、現実在と一致せしめられ、現実在と結合するのである。

上の、目的論的關係は、当初、主体的・有限のおよび外的合目的性として把握される。けだし、「主体的 (有限) 目的は、特殊な、故に、また、多様な内容を持ち、客観の従属性に奉仕するところの主体的・個別的目的の一群のうちに存立する。客観は、この目的の奉仕において、使用され、利用される」からである。⁽¹⁾ヘーゲルは説いて、いわく。「主観は、衝動を満足させる、形式的理性の活動、すなわち内容を主観性 (Subjektivität) から客観性 (Objektivität) に移行する活動である。内容は、主観性においてある限りは目的であり、主観は客観性において、自己を自己自身と結合させるのである」⁽²⁾と。目的は、それが、単なる主観的なものであり、また表象の中にある限りは、ヘーゲルにとっては、欠陥を負っていることになる。「というのは、自由と意志は、主観性と客観性との統一体であるから」⁽³⁾である。意志は、この欠陥を止揚する活動であり、目的を客観性に移す (übersetzen) 活動である。⁽⁴⁾

ところで、「客観性に還帰すべき傾向 (Tendenz) を有する主観的目的 (subjektive Zweck) は、緊張 (Spannung) の状態、それ故、その状態と傾向との、また、主観性と客観性へと向かう意志との矛盾の状態にある。この矛盾は、ただ、目的活動性 (Zwecktätigkeit) によってのみ解決しうる。すな

わち、目的は、これによって、客観を把握し、それを自己に従属せしめ、自己への奉仕に用い、自己を実在化しまたは客観化することによってのみ、解決せられうるし、また、解決される」からである⁽⁵⁾。

Ⅱ かように、行為する意志は、目前の定在に向けられた自己の目的のうちに、その定在に附随する諸種の事情の表象をもつ⁽⁶⁾。しかし、意志は、このような予想に制限されるが故に有限であるから、対象として現われる現象は意志にとっては偶然的でありうる⁽⁷⁾。そして、偶然性の契機は、意志内容の裸の (bloßen) 所与性 (Gegebenheit) の中に存在する。というのは、意志は、それが問題としている意志に対立する定在に関する表象を有しなければならないから、意志は有限ではあるが、意志に対する対象としての現象 (Erscheinung) は、偶然的なものであって、この現象は、そのうちに、表象中にあるもの以外のものをふくみうるからである⁽⁸⁾。

すなわち、主体的意志は、形式上、それとは異なった客観との関係において成立しているものであるから、その外面化である行為は、当初、直接性の形態を有している。この行為には、多様な性質を有した外部的对象が、前提されたものとして対立している。主体的意志は、目前に存在する定在に変化を加えようとするのであるが、意志は、この場合、先に述べたように目的をもっているが故に、前提せられた対象の状態についての対象をもっている。かような前提を条件とする限り、主体的意志は、有限であり、また、対象的現象は、この意志にとっては、偶然的でもあり、表象しなかったもので、保有するかも知れないのである⁽⁹⁾。

したがって、恣意的行為 (die willkürliche Handlung) は、偶然的なものをふくむことになる。例えば、猟師が、野獣と取りちがえて、人を射殺した場合、または、行為者が、装填されていないものと信じて、実際は、装填された銃を発射した場合などがこれである⁽¹⁰⁾。

上の例は、ヘーゲルによると、どのように考えられるべきものであろうか。ヘーゲルは、「故意 (Vorsatz) は、ただ、外部にあらわれた意志が、内的なものとして、私のうちに存在すべきであるという形式的なものに関係するに

すぎない」⁰¹という。故意において、行為者は、一定の目的を予見する。また、故意は、目的が現実化されねばならない一定の事態の状態についての直接的な知（Wissen）をふくむのみならず、行為の必然的な結果についての表象をもふくむ。⁰²上例において、行為者は、外的事情を理解しているのではあるが、所為（Tat）——ヘーゲルによると、これは、外部的出来事を意味するが——⁰³は、行為者の表象したものとは異なっている。所為が、偶然性に属している場合には、行為者に、その行為を帰せしめることはできないと考えるのである。なぜかという、ヘーゲルは、「意志の法は、自己の所為の中で、ただ、自己の表象の中にふくまれていたものだけを自己の行為として認めるということである。すなわち、自己の所為の前提について、自己の目的の内で知っているもの、自己の故意の中に属するもののみ責任を有する。所為は、ただ、意志の責任（Schuld）としてのみ、帰責されうるにすぎない」⁰⁴と論ずるからである。これ、すなわち、ヘーゲルのいう知の法（das Recht des Wissens）にはかならない。だから、自分の父であることを知らずして、父を殺害したエディプスに、尊属殺の刑責を問うことはできないことになる。ヘーゲルによると、先に若干触れるところがあったが、「法にしたがってのみ、意志は何ものかを承認し、意志は、ただ、それが自己のものである限り、そして、その何ものかのうちに意志が自己にとって主観的なものとしてある限り」⁰⁵においてのみ帰責がありうるのである。

行為（Handlung）として、すなわち、私の所為（Tat）として、それが、原則的に帰責せしめられるときには、それは、「私の自由に関係して存在するところのもの」⁰⁶であって、また、認識されたものであらねばならず、これにして、はじめて、故意の内容に被覆されることになるのである。⁰⁷

かようにして、ヘーゲル刑法哲学体系における帰責の基礎は、ただ、故意行為についてのみであって、過失行為は考慮されていないことはここで確認しておく必要があるであろう。⁰⁸

Ⅲ 道徳性の立場からは、必然的なものと偶然的なものとは相関的であって総合されてはいないのである。しかも、この対立は、それを別個のものと

して考えようとする¹⁹と相互に変転する。したがって、必然化されたようにみえるものも偶然に転化する。何故かという²⁰と、行為には、故意において必然的と考えられていたものが、実は偶然的にすぎなかったために、生ずるにいたらないこと、逆に故意において偶然的と考えられたもの、あるいは予想され得なかったものが、外的必然性の結果として、入りこんでくることがあり得るからである²¹。

ちなみに、ヘーゲルが、「結果が完全に実現された 犯罪には、この結果の責が負荷する²¹」と示唆に富む提言をしていることに注目しておこう。

さて、しばしば、指摘をしているように、行為とその結果との連続性(Au-feinanderfolge)は、外面的には必然的でもあり、また、同時に偶然的でもある。換言するならば、ヘーゲルは、外面的な因果の必然性は、偶然性と本質においては同一であると把握するのである。

そして、客観的帰責の弁証法は、所為の偶然的結果と固有の結果が、同時に混淆し、相互に移行するところに存立することに注目しなければならない。というのは、「有限なものにおける内的必然性は外的必然性として、すなわち、個々の事物の相互関係として、定在の中にあらわれるが、これらの事物は、独立したものとして、相互に無関心かつ外面的に集合するからである²²」。

ところで結果は、それ自体が固有のものではない。結果は、無限の連続の中で、多くの相互に存立する同価値の分枝の一にすぎない²³と考えるべきものであろう。この問題は、精神それ自体の矛盾に由来する。ヘーゲルは、この解決されざる本質の矛盾を、意志によって止揚する。すなわち、ヘーゲルは、原因と結果は、目的において同一化すると考えた²⁴。目的は、ヘーゲルによるならば、主体的意志が、その対象を超越するところの統一体である。けだし、意志は、外部的現実在の中に、対象を、その目的として導き出し、意志は、これを自己のものとするからである。故に、意志は、他の原因に作用するのではなくして、固有の原因に作用するのである。かくして、原因は、目的に達する手段となり、また、目的において、主体の活動に由来する原因連鎖は、その端初と結末をみいだすにいたる。「エンチクロペディー」の表現を引用

するならば、「本来の姿を保っている」のであるし、「原因について、それが結果を有する限りにおいてのみ原因であるといい、結果に関しては、それが原因をもつ限りにおいてのみ結果であるという。したがって原因と結果とは、同一の内容」である。したがって、また、原因は、まさに自己因 (causa sui) である。すなわち、原因連鎖は、目的に奉仕し、目的を通して、主体の中に還帰するのである。

この「主体的目的に対する客観の従属または包摂 (Subsumtion) は、一つの判断 (Urteil) である。すなわち、目的の現実化 (Realisierung) は、目的が、客観によって、その中で、自己と結合するところの推理 (Schluß) である。目的は、端緒であり、また、結末であり、原因、目標 (Ziel) であり、したがって最終的な原因である。しかるに推理の手段は、目的に奉仕する客観である」。また、「目的の実行 (Ausführung) は」、「手段を媒概念 (Mittelbegriff) とする推理である。主体的目的が、手段としての客観に対する関係は、第一前提である。そして、その中で、それについて、目的が、自己を形成すべき素材 (Material) としての客観に対する手段の関係は、第二前提である」。だが、この両前提は、手段の範囲が、果しなく広がるから無限なる媒介に陥いる。ために、「主体的目的活動性は、手段から生ずることはなく、単なる手段を前にしては、目的に達することはない」のである。

故に、「真に無限なる目的は、その手段を自己の外に有するのではなくして、自己の中にもつ。それは、自己を自己によって媒介する。真に無限なる目的は、自己を實在化する概念、自己を客観化する主観性、従って、概念と實在性との、また、客観性と主観性との統一体である」ということになる。

かくして、偶然的な相互の存在は、目的にみちた全体となる。別言するならば、意志は因果の流れの中にあらわれ、これに方向を与え、支配する。かような方法で、意志は、自然的な出来事を支配し、それを固有の所為に変えるのである。いわゆる因果性 (Kausalität) は、「目的」において、正確な意味で止揚される。繰り返すまでもなく、自然の反対定立性は、意志により高められ、原因と結果は、自然の中で、独立した相互に対立する同等に妥当する

事物として存立し、目的において同一化する。目的は、主観性と客観性との統一体であるからである。

この点から、ヘーゲルは、目的によって行為が支配せられ、それ故、行為によって全体が形成されるという所為(Tat)のその結果に対してのみ帰責がなされるという帰結を呈示したことになる。

ところで、行為の普遍的内容としての目的を、周知のように、ヘーゲルは、「意図」(Absicht)と名付けたのである。「私の表象であったもののみを承認する」⁸⁹が、「この『わたくしの表象』は、単に直接的な存在に関する表象のみを意味することはできず、それはなお「存在の実体的なものに関する」表象をも含まなければならないことになる」⁹⁰。ヘーゲルは、かように、「普遍的なものがわたくしによって意志されたもの、それがわたくしの意図(Absicht)なのである」と説く⁹¹。意図は、故意により拘束され、所為のうちに、直接的に現実化された表象(Vorstellung)の普遍性を表現するのである⁹²。

燃えたマッチ棒による木片への接近、肉体の一部分に対する刀剣による一突きは、放火、殺人として普遍的な質の中にあらわれるのであって、個々の木片に対する点火でもないし、また、一片の肉が傷つけられるのではない、そこには、焼燬があり、また、生命の毀損があるのである。

ヘーゲルはいう。「行為の普遍的質は、即自的に存在するのみならず、行為者によって認識されていること、したがって、既に、行為者の主体的意志のうちに存在していたのでなければならない。逆に、これは、行為の客観性の法といいえようが、行為が、思惟者としての主体により認識せられまた意欲されたものとして、自己を主張することである」⁹³と。

Ⅳ さらに、ヘーゲルは、行為者(Täter)は、結果を個別に予見する必要はない、とする。行為者は、所為の普遍的な本質(Natur)を認識していれば、それで十分である。行為者は、全体としての行為によって、その個別的・必然の結果を帰責せしめられるというのである⁹⁴。

(1) Fischer, Kuno; Geschichte der neuern Philosophie, Bd. VIII—Hegels

Leben, Werke und Lehre, I. Teil.—8. Aufl., 1911. S. 551.

- (2) Ency. § 475.
- (3) Rph. § 8 Zu.
- (4) Vgl., Rph. § 9 u. § 109.
- (5) Fischer, a. a. O., S. 551. レイバアンは、ヘーゲルが、「事物が目的に対する手段として意志の中に存在するということ」を論ずるという (Reyburn, The Ethical Theory of Hegel, p. 166)。
- (6) Rph. § 117.
- (7) Vgl. Rph. § 117.
- (8) Vgl. Eckhart von Bubnoff, Die Entwicklung des strafrechtlichen Handlungsbegriffes von Feuerbach bis Liszt, S. 44.
- (9) 田村実「ヘーゲルの法律哲学」194頁参照。
- (10) Vgl. Karl Larenz, Hegels Zurechnungslehre, S. 52.
- (11) Rph. § 114 Zu; vgl. Ency. § 504.
- (12) Vgl. Derbolov, Hegels Theorie der Handlung, S. 206.
- (13) Vgl. Rph. § 118 Anm.
- (14) Rph. § 117.
- (15) Rph. § 107.
- (16) Rph. § 117 Zu.
- (17) Vgl. Rph. § 117.
- (18) Larenz, a. a. O., S. 55; vgl. Radbruch, Der Handlungsbegriff in seiner Bedeutung für das Strafrechtssystem S. 101. ただし、「法の哲学」において、意志領域の帰責原則がのべられているのは注目されてよい(Rph. § 116)。
- (19) Vgl. Rph. § 26 Zu.
- (20) 高峰一愚「法・道徳・倫理」132頁参照。
- (21) Rph. § 118.
- (22) Rph. § 118. Anm.
- (23) Vgl. Wentscher, Geschichte des Kausal Problems in der neueren Philosophie, 1921, S. 201 f.
- (24) Ency. § 204; § 153. Zu. すなわち「結果のうちに入りこむことにより、現実には、原因は原因それ自体となる」(Reyburn, op. cit, p. 30)。
- (25) Fischer, a. a. O., S. 551.
- (26) Fischer, a. a. O., S. 553.
- (27) Fischer, ebenda.
- (28) Fischer, a. a. O., S. 554.
- (29) Rph. § 118. Zu.

80) 高峰・前掲 133頁。

81) Rph. § 118.

82) Vgl. Rph. § 121, § 122.

竹下直之「ヘーゲルの客観的精神」202頁はいう。「行動主観の内的規定が観察される限りでは、即ち私が一つの行為に対して私の意志に責任を有する限りでは、Vorsatz und Schuld の契機が成立する。次に遂行された行動が、その結果に由ってではなく、私に関係しての相対的価値に由って見られる限り、Absichtの契機が成立する」と。

83) Rph. § 120.

84) Vgl. Rph. 118 Zu.

五 結 語

弁証法は、存在と思维との統一において理解されねばならない。存在と思维との統一は、客体と主体との統一、または、即目的にあるものと、その自己反省との統一、すなわち概念であることになる。故に、「弁証法は概念の弁証法であり、概念の発展形式⁽¹⁾」である。ために、ヘーゲルは、意志をば「主観的なものと客観的なものとの統一⁽²⁾」として把持したから、その外面化であるところの行為も、また、主観・客観の統一⁽²⁾として把握することになったのである。

そして、第二、ヘーゲルは、「行為は主体の目的である。同様に、この目的を実現する主体の活動も行為である⁽³⁾」と解するから、目的は、主体的意志が、その中で、その対象を超越する統一⁽³⁾であることになる。ために、意志は、因果の流れの中にあらわれ、これを支配する。そうして因果性は、目的において止揚されるにいたる。かくして、目的によって行為が支配せられるという関係が、ヘーゲル理論から明らかになるのである。

そして、また、ヘーゲルによると、帰責の判断は、それによって、出来事の原因が問われる因果の判断ではなくして、目的論的（teleologisches）判断である。というのは、所為に対する帰責は、意志にもとづく出来事の関係として認識されるからである。ヘーゲルにしたがうと、意志は、ただ、因果の

過程のみを支配するのであるし、また、偶然的な連続性のみを自己の所為に変えることができる。したがって、ただ、意志担持者に対して帰責がなされう。かように、意志担持者は、所為の創造者であり、形成者でもある。意志担持者は、目的を設定・実現し、その所為性において、盲目的な因果の過程を⁽⁵⁾変成する能力をもつのである。

かような分析から、ヘーゲルの行為論は、その目的的な構造、意志＝目的関係的な帰責判断において、現代刑法学において、目的的行為論が、「行為支配」⁽⁶⁾(Tatherrschaft)として特徴づけたものと、思考基底上、きわめて、類似した構造をもっているようにおもえるのである。⁽⁷⁾

目的的行為論は、ハルトマンの哲学にその淵源を求めることができるといわれている。この存在論哲学の第一人者が、ヘーゲル哲学の論理学の第一部有論と第二部本質論は、「全くのところ、オントロギー（存在学）なる名称で通していい。否、実にその細目に至るまで、徹底されたるオントロジーであるにほかならない」、「それは哲学の存在論的基礎である」⁽⁸⁾と断定的に評価しているのはまことに興味深い。そして、三枝博士が「ハルトマンの立場からのヘーゲル解釈は、ヘーゲルを「存在学的思索家に没落せしめることである」⁽⁹⁾とする指摘もあるように、ハルトマンが、ヘーゲル哲学を自己の哲学の基礎としたのもまた、事実であるといえよう。

この間の理論的架橋の追考とその解明には、なお、検討を要すべき多くの課題のあることを、論者自身に課して、いちおう本稿を閉じることにする。

(1) 田村実「ヘーゲルの法律哲学」38頁。

(2) Rph. § 8 Zu.

(3) Ency. § 475.

(4) Vgl. Wentscher, Geschichte des Kausal Problems in der neueren Philosophie, 1921, S. 205 ff.

(5) Larenz, Hegels Zurechnungslehre, S. 67.

(6) Maurach, Deutsches Strafrecht, Allgem. Teil, S. 504; Welzel, Das Deutsche Strafrecht, 11. Aufl., 1969, S. 100f.

(7) Vgl. Eckhart von Bubnoff, Die Entwicklung des strafrechtlichen

Handlungsbegriffes von Feuerbach bis Liszt, S. 40.

- (8) Nicolai Hartmann, Die philosophie des deutschen Idealismus, II.

Teil; 1929, S. 32; vgl. Heimsoeth, Metaphysik der Neuzeit, S. 156.

- (9) 三枝福音「論理の科学」331頁参照。